

平成二十五年 度

中学校 Ⅷ 第一回 Ⅴ

国 語

〈 注 意 〉

- 一 「始め」の合図があるまで、中を開けないで、注意事項をよく読んで下さい。
- 二 解答用紙は中に折り込まれています。最初に受験番号と氏名を解答用紙の指定欄に記入して下さい。
- 三 解答はすべて解答用紙の指定欄に記入して下さい。
- 四 字は濃く、はっきりと丁寧に書いて下さい。
- 五 字数には、句読点も記号も一字として数えます。
- 六 鉛筆、シャープペン、消しゴム以外は使用できません。
- 七 問題冊子は十六ページまであります。
- 八 「開始」・「終了」は監督の先生の合図に従って下さい。
- 九 早く解けても教室の外には出られません。
- 十 試験終了後、問題冊子は持ち帰っても結構です。

一、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

自分はここに来たことがあるのかな、と大介は思った。

暗い森を抜けた大介たちの頭上には、六月のまぶしい太陽があつた。みずみずしく茂る膝丈くらいの草の向こうに、ちよろちよろ流れる川が見える。

この光景には淡い既視感があつた。だけど何も思い出せない。

五人の小学生は川の脇の小道のようなところを黙って歩いた。さつきまで、薄暗い森の中を一行になつて歩いていたときは、代わる代わる声をだしていた。①とどき話し声がやんでも、誰かがすぐまた声をだす。だけど明るいところに出たら、口数は減ってしまった。児童館の集まりで、ここにキャンプに来ていた。

二日目のイベントはウオーク・ラリーで、幾つかのグループに分かれて、朝から歩いた。プリントの地図を頼りに、この辺りの史跡や寺や滝を訪れる。ところどころにチェックポイントがあつて、そこに行けば大人がハンコを押してくれる。

最初は隊列を組むように整然と歩いていた。だけど関山という小さな丘のてっぺんで弁当を食べたあとは、②山や谷を歩いた。どつちに行けばいいか迷ったり、大きな目印に着いたりしたときだけ、プリントを中心にわらわらと集まる。

初めてハンコを押してもらったときは、ちよつと嬉しかった。だけど三つ目のハンコをもらった頃には、すっかり飽きてしまった。

「橋まで、あとどれくらいかな？」

メンバーの一人が声をだした。

「たぶんもう少しだよ」

先頭を歩く麻里が答えた。麻里はこのグループのリーダーで、その役割をきっちりと任っている。五人のグループは今、最後のチェックポイントに向かって歩いていて、

史跡を歩き回ってハンコを集めるなんていうのは、子供だましでモンキーなイベントだと大介は思う。だけど、このイベントには深い目的があつて、それはすなわち――、

少年少女は、こういう行事を通じて視野を広げていく。また仲間と協力して何かをやり遂げることで、成長し、大人になる準備をしていく。

だが、それって、と大介は思う。

そんなのって、本当に、本当なんだろうか……。

いつの世も、そういうことが、小学生に要求されるということはわかる。それを望む人がいて、そういう人が少年少女の成長ストーリーを信じているということもわかる。

だけど、どのくらい信じているんだろう……。

どっちにしても小学生は、魔法にかけられたような顔をして、小学生をすいこうするしかない。それを望む人がいるのなら、できる限りその希望を叶えてあげたいとさえ思う。別に辛いことをするわけではないのだ。小学生が誰かに与えられるものなんて、他には何もないのだし。

それに、こういうことで視野が広がるというのは、嘘ではなかった。

目の前の森の緑は普段見ないものだし、聞こえてくる川の音だつてとても新鮮だ。人間はもとと、こういう音や色を、日常の中で感じながら生活をしていて、そこに思いを馳せることは、自分に深みを与えるだろう。また、大きな目的のために、仲間と協力するというのはとても大切なことだし、やり遂げた喜びも大きいだろう。

なのだけれど……。

史跡を歩いて、ハンコを集めて、視野を広げる……。

④ なまじ山道がきつかったりするから、ハンコはいらないだろう、とよけい思ってしまう。三年生ならいいのかもしれないけれど、自

分はもう五年生なのだ。

森を出てからは、太陽が照っていた。自分の影を踏むように、大介は下を向いて歩いた。足下を見つめながら歩くことに集中していると、一歩ごとに自分の息づかいが聞こえてくる。

さつきから、この景色に見覚えがあるような気がしていたけど、やっぱり何も思い出せなかった。

「あー」

と、突然、麻里が声をだした。

「橋だ、あそこ！」

麻里の指の先に、光景は広がっていた。

山と森の向こうに、青い空がくっきりと映えている。下を流れる川は、きらきらと光り、その先には、確かに橋らしきものがある。

五人は橋を目当てに歩いていたので、あー、とか、おお、とか、それぞれ声を漏らした。あの橋を渡れば、最後のチェックポイントまであと少しだ。

大介たちは早足になってその場所に向かった。⑤ 着くまで、何もしやべらなかつた。橋の上に着くと、麻里の出した地図を中心に、女子三人が集まった。

大介は欄干に手をかけ、もう一人の男子は反対側の欄干にもたれかかった。人しか渡ることのできないような小さな橋だった。

「あとはまっすぐだね」

麻里が言う横で、川上の方角を見渡した。

七歩か八歩で渡れそうな小さな川だ。水際には背の低い草が生え、ところどころ小さな岩が見える。兩岸に森があつて、左手の森の手前に今まで歩いてきた道がある。

⑥ 光景を見渡しながら、大介の心は、溶けるように、それを理解していった。

やっぱり自分は、ここに來たことがある。

思い出したというより、大介は気づいたのだった。

今、見渡す光景は輝かがやいている。川はさわさわと流れ、森は深緑に茂っている。森に沿った小道が、ゆるい弧こを描えがいて延びている。光や緑の織おりなす鮮あざやかなこの光景は、記憶とは色いろが違ちがった。だからなかなか気付かなかったのだ。

「ここって、來たことあるよ」

と、大介は言った。他の四人の注目が、一斉いっせいに彼に集まる。

大介は橋の上にあつた小石を蹴けった。石はゆるい軌跡きせきを描き、川に落ちる。

あのときの光景は、こんな鮮やかな色ではなかった。だけど今の光景が、色を落としていけば、記憶きおくの景色ができあがる。

「ここって去年、ホテルを見たところだよ」

橋からの光景を見渡した数人が、ああ、と感心したような声をだした。

去年、大介たちはホテルを見るために、夜、ここに來た。児童館キャンプの、夜間ハイクという行事だった。今來た道と反対の方（つまりこれから向かう方向）から、大人も含めた数十人で歩いてきた。

「……ホテル？」

小さな声で、麻里が訊きいた。麻里は去年のキャンプに参加していなかった。

「あつちにいっぱいいたんだよ」

川上の方角を指さした。麻里の視線は、大介の腕うでをまっすぐになぞり、やがてその先の森を見つめる。

今は指さしているけど、あのときは照らしていた。

あのとき、日が暮れる前にここに着いた大介たちは、懐中電灯であちこちを照らしながらホテルを待っていた。ホテルというのは屍しりを光らせるという、特殊なアビリティを持った、かなりレアな虫だ。

暗くなれば出てくるだろう、と、大人は言ったが、本当なんだろうか、と半□半□^⑧だった。出てくるんだったら、今だってそこらの葉っぱの裏とかにいるはずで、でも大介たちが調べた限り、そんなものはいない。

やがて日が暮れ、あたりが真っ暗になっても、ホテルは現れなかった。やっぱりそんなレアな虫を自然の中で見つけるなんてことは、極めて難しいことなんだろうな、と勝手に納得し始めていた。

だが闇やみの中、それは突然現れた。

いた！ いた！ いたいたいたいたいた！ いたー！

猛烈にテンションをあげた大介たちは、雄叫おたけびをあげた。

ふわーん、とホテルは上空を飛行した。大介たちは大騒ぎしながら、その光を追う。

ホテルは滑すべるような軌跡を描き、小学生の手の届かない上空を飛行した。ほのかな光の尾が、暗闇に、すー、と伸びる。大介たちは全力で走った。頼りなげな光を追ひ、道を走り、草に分け入る。

淡くて不思議な光は、小学生を導くように、森の方角に進んだ。だけどやがて、線香花火が燃え尽つききるように、ふっ、と消えてしまつた。

「あれっ？」

「どこいった!？」

大介たちは木を見上げたり、地面に目を凝こらしたりした。だけど、どれだけ探しても、消えたホテルは見つからなかった。

「けど、やっぱりいたんだな」

と、大介は言った。

「ああ」

と、友だちは言う。うひょー、と遠くから下級生の奇声が聞こえる。

ホテルを逃したのは悔しかったけど、それなりに満足していた。ここにはやっぱりホテルがいた。かなりレアなものを、自分たちは見た。

「あ、ホテルだ」

と、大介は声をだした。どこどこどこ？ と周りの注目が集まる。

「そこ」

大介は持っていた懐中電灯の光を下級生の尻に当てた。

——ぶっ、と友だちが笑った。本当だ、ホテルだ！

やがてその行為は集団に伝播し、森には何匹もの小学生ホテルが発生した。大介たちは、互いの尻を照らし、声をあげ逃げ回った。そのとき遠くから、声が聞こえてきた。

「いるぞー」

足をとめた小学生たちが、声のほうに振り返る。

「こつちにもいるぞー」

大介たちは森を飛び出した。どうやら川下のほうに、ホテルが現れたらしい。

いるっ！ いるっ！ いるいるいるいるっ！

橋に残っていた人たちが、川下を見て騒いでいた。そこに割り込んで目を凝らせば、闇の先に、一筋の光が浮遊していた。追おうとしたとき、「こつちにもいるぞー」と反対から声が聞こえた。

右のホテルを追おうか、左を追おうか迷い、大介は結局左に向かった。だけどまた背後から、「こつちにもいるぞー」と声があがった。気付けばあちらでもこちらでも、ホテルは飛んでいた。二匹が四匹になり、四匹が八匹になり、八匹が十六匹になり、その先は乱舞だった。

乱舞——。大介たちは足を止め、ホテルが宙を舞う様を見つめた。大乱舞——。

それはまるで、熱狂を帯びた祭りのようだった。

こんなにもたくさんのホテルが、いったいどこから湧いてきたのだろう、と思う。^⑩千年眠り続けた大量のホテルが、その夜、一斉に目を覚ましたかのようだった。

(中村 航「星に願いを、月に祈りを」より 一部表記・体裁を改めた)

※アビリティ：能力 ※レア：珍しい・まれな

問一、——①「ときどき話し声がやんでも、誰かがすぐまた声をだす。だけど明るいところに出たら、口数は減ってしまった」とありますが、このときの説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 暗い森ではハンコをもらったうれしさから声が絶えなかったが、川の脇の小道では空腹で言葉少なになっている

イ 暗い森ではハンコをもらったうれしさから声が絶えなかったが、川の脇の小道ではあせりから言葉少なになっている

ウ 暗い森では不安から声を絶やさなかったが、川の脇の小道ではまぶしい太陽に照らされて言葉少なになっている

エ 暗い森では不安から声を絶やさなかったが、川の脇の小道では遠くの人の声が聞こえるように言葉少なになっている

問二、(②)に入る言葉としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア てくてくと イ ずんずんと ウ そわそわと エ だらだらと

問三、——③「魔法にかけられたような顔をして」とありますが、これはどのようなことですか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 少年少女の成長ストーリーが、ばからしいというふりをして

イ 少年少女の成長ストーリーが、納得できないというふりをして

ウ 少年少女の成長ストーリーに、うまく乗せられたふりをして

エ 少年少女の成長ストーリーに、うまくだまされたふりをして

問四、——④「なまじ山道がきつかったりするから、ハンコはいらないだろう、とよいい思ってしまう」とありますが、この理由と
してもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 五年生の大介には、ハンコをもらうことは、きつい山道を登るための励みにはならないから
イ 五年生の大介には、ハンコをもらうことより、きつい山道を登ることの方が励みになるから
ウ 三年生ならハンコをもらうことが、きつい山道を登るための励みになるかもしれないから
エ 三年生ならハンコをもらうことより、きつい山道を登ることの方が励みになるかもしれないから

問五、——⑤「着くまで、何もしゃべらなかつた」とありますが、この説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 最後のチェックポイントが近いはずだが、そのことを言う自信がないということ
イ 最後のチェックポイントが近いはずだが、確信がもてず不安になっているということ
ウ 最後のチェックポイントが近いはずなので、もう気持ちがいばらばらになっているということ
エ 最後のチェックポイントが近いはずなので、また氣力がわいてきたということ

問六、——⑥「光景を見渡しなが、大介の心は、溶けるように、それを理解していった」とは、どのようなことを表していますか。
もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 仲間と協力してやり遂げる行事の目的の正しさを理解していったということ
イ 記憶の光景と眼前の光景の特徴とを一つ一つ照らし合わせているということ
ウ まっすぐ進めば橋にたどり着くという麻里の意見を確信しているということ
エ 七・八歩で川が渡れるという自分の認識の正しさを確認しているということ

問七、——⑦「この光景は、記憶とは色が違つた」とは、どのようなことですか。次の一文の空欄にあてはまる言葉を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

この光景は□の光景で、記憶の光景は□の光景だつたということ。

問八、——⑧「半□半□」は四字熟語ですが、□にあてはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

問九、——⑨「その行為は集団に伝播し」とありますが、これはどのようなことを表していますか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ホテルを見つけて笑い合うという行為が、次々に広がっていくこと
イ 懐中電灯の光を自分の尻に当てるホテルのふりをするという行為をまねること
ウ 懐中電灯の光を他人の尻に当てるという行為が、次々に広がっていくこと
エ 尻の近くを飛ぶホテルを懐中電灯で照らして見つけるという行為をまねること

問十、——⑩「千年眠り続けた大量のホテルが、その夜、一斉に目を覚ましたかのようにだつた」とありますが、なぜこのように感じ
たのですか。次の文の空欄にあてはまる言葉を、文中の言葉を使って十字以内で答えなさい。

を見て感動したから。

問十一、この文章の特徴としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大介の行事に対する感想を具体的に描写し、大介の弱い性格を強調している
イ 森を強調することにより、読者に自然のおそろしさについて考えさせている
ウ ホテルの思い出を具体的に描写することで、森の大切さを強調している
エ 光景を具体的に描写することで、読者と登場人物の視点が重なる効果をあげている

二、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

「地位も、名譽も、金もない」などと、悲観するなかれ。

本当に、それらが手に入ったら、幸福になれるのだろうか。

千二百年前の中国の故事、「炊の夢」^①が、考えるヒントを与えてくれる。

一人の老人が、邯鄲^{かんたん}へ向かって旅をしていた。

街道沿いに茶店が見えてきたので、一休みすることにした。

すると、廬生^{ろせい}という名の若者が入ってきて、老人の側に腰かけた。粗末^{そまつ}な身なりをしている。野良仕事^{のら}へ行く途中らしい。

初対面ではあったが、互いに打ち解けるものを感じて、話がはずみだした。

そのうち、廬生は、

②「男として生まれながら、思うようにならず、情けないありさまです……」

と、大きなため息をついてしまった。

「どうしたんだね。おまえさんの体は、どこも悪いところもなさそうだし、今の今まで楽しそうに話していたじゃないか」

「何が楽しいのですか。毎日、ただ生きている、というだけです」

「では、どうなれば幸せなのかな」

廬生は、語気を強めて言った。

「男である限り、立身出世を果たし、名譽と地位を手に入れたいのです。豪華な家を建て、使い切れないほどのお金に恵まれ、好きなことができてこそ、幸福といえるのではないのでしょうか。ところが、私はもう三十になったのに、みすばらしい服を着て、田んぼであくせく働いている……。これがみじめでなくて、なんでしょうか」

言い終わったかと思うと、なにやら眠気がさしてきた。

この時、茶店の主は、黍^{あむじ}の飯を炊き始めたところだった。

老人は、袋^{ふくろ}の中から青磁^{せいじ}の枕^{まくら}を取り出して、廬生に言った。

「この枕で眠るがよい。おまえさんの言う榮耀^{※えいよう}榮華^{※えいけ}とやらの、望みをかなえて進ぜよう」

廬生は、横になって、枕に頭をのせた……。

数カ月たった。

廬生は、大富豪の家から嫁^{よめ}をもらうことになった。絶世の美人である。それからというもの、服装も乗り物も、日に日に派手になっていった。夢にまで見た贅^{ぜいたく}沢な生活にひたり、大喜びであった。

翌年、役人の採用試験に合格。順調に出世街道を歩みだした。地方の知事や長官を歴任し、大きな業績を上げていく。

そのころ、西方から異民族の襲撃^{しゅうげき}があった。玄宗皇帝^{げんそうこうてい}は、廬生を見込んで將軍に拔擢^{はつてき}した。今度は軍隊の指揮官として、才能を発揮するチャンスに恵まれたのである。

彼は兵を率いて外敵を撃破^{げきは}し、華々^{はなはな}しく、長安の都に凱旋^{がいせん}した。この大勝利によって廬生は、またもや昇進^{しょうしん}して、国家の重要なポストに就いた。

いいことはばかりは続かないものである。廬生は、清廉潔白^{※せいれんけつぱく}であったが、あまりにも人望があったので、上官に妬^{ねた}まれるはめになった。ありもしないことで非難^{※ちゅうしやう}中傷^{※ちゅうしやう}され、田舎の役人に左遷^{※させん}されてしまう。

しかし、それも三年だけで、再び中央に復帰できた。まもなく、宰相^{さいしやう}という、国政で最高の地位に就いたのである。天下の政治を執^とり行うこと十余年、皇帝を補佐して、名宰相の誉^{ほま}れが高かった。

ところが、廬生の活躍^{かつやく}を妬^{ねた}んだ者たちが、

「宰相は、国境を守る將軍らと結託^{けつたく}して、謀反^{むはん}を企てている。自分が皇帝になって国を盗^とるつもりらしい」

と、(④)事実かのごとく言いふらした。[※]軍事クーデターの恐怖が、皇帝の脳裏をよぎった。

役人が、廬生の邸へ急行する。

「謀反の疑いによって逮捕する。皇帝陛下の命であるぞ！」

がつくりと気を落とした廬生は、妻に向かって言った。

「私は、若い時に田舎に住んでいたが、良い田んぼを持っていた。寒さや飢えをしのぐのに十分な生活であったのに、どうして、こんなに苦勞してまで出世しようとしたのだろうか。今となつては、粗末な服を着て、邯鄲の道を歩いていたところが懐かしい」
刃物を引き寄せ、自殺しようとしたが、妻が懸命に止めたので果たせなかった。

この事件では、大勢の人が死刑になった。しかし廬生だけは、助命を嘆願する声があがったため、流罪ですんだのであった。

皇帝が、廬生の冤罪に気づいたのは、数年後である。その間、じつと言行を慎んでいた廬生は、これまで以上に信任され、再び、宰相の座に返り咲くことができた。

政界に重きをなすこと数十年。

まさに栄耀栄華を極めたといえる。

八十歳を超えた廬生は、肉体の衰えを感じていた。寄る年波には勝てない。⑥何度も辞職願を出したが許されなかった。やがて病気になる、見舞客が、引きも切らずやってきた。名医が来診し、高価な良薬が惜しげもなく使われる。

廬生は、皇帝へ書を送った。

「内外に奔走しているうちに、またたく間に月日が流れていきました。身に過ぎた位を賜った私は、かえつて皇帝陛下にご迷惑をおかけするのではないかと、⑦薄氷を踏むような思いで、任務に全力を尽くしてまいりました。しかし、もはや病は重く、気力も衰え、死を待つばかりでございます。ご恩にお応えすることができず、誠に申し訳ございません」

皇帝は、見舞いに勅使を派遣したが、その日の夕方、廬生は死んだ。

「ああ、俺は死んだか……」

廬生は、大きなあくびをして目を覚ました。

名家の娘と結婚するところから、国家の元老として死ぬまで、五十年の間の夢を見ていたのである。

五十年といえ、実に長い歳月に思える。それなのに、どうであろうか。茶店の主が炊いていた黍飯は、まだ、できていなかったのである。

廬生は、がばつと身を起こして、

「ああ、夢だったのか……」

とつぶやいた。まるで自分に言い聞かせるように。

⑧老人は、笑いながら言った。

⑨「人生の楽しみも、こんなもんだよ」

廬生は、

「名誉や地位、財産を手に入れた喜びが大きければ大きいほど、失った時の悲しみ、苦しみが大きいたことが知らされました。一国の宰相と、貧しい農民を比べて、どちらが幸せとも言いません。夢のような、はかない人生を、何にかけるべきか、考えるチャンスを与えていただきありがとうございます」

と、深々とおじぎをして、茶店を出ていった。

これは、唐の時代に書かれた『枕中記』のあらましである。

物語は、ここで終わっている。さて、あなたが廬生ならば、このあと、⑩どんな人生を選ぶだろうか。

（木村 耕一）「こころの道」ものの見方、考え方ひとつで、新しい風が吹いてくる」より 一部表記・体裁を改めた

※栄耀栄華…大いに栄えること ※清廉潔白…心が清く行いが正しいこと

※中傷：根拠のない悪口を言つて、人の名誉を傷つけること

※軍事クーデター：武力で政権を奪い取ること

※**冤罪**：無実の罪

問一、——①「二炊の夢」を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文中から十一字で抜き出して答えなさい

産生のみた夢は、黍飯が くらいに、短く、はかないものであるということ。

問二、——②「男として生まれながら、思うようにならず、情けないあります……」とありますが、廬生の望む生き方が書かれて
いる部分を文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問三、——③「田舎の役人に左遷されてしまう」とありますが、これは「地位を格下げされた」ということです。「左遷」の反対の意味の熟語を文中から抜き出さない。

問四、(④)に入る言葉としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ちようど
イ　あたかも
ウ　よもや
エ　おそらく

問五、——⑤「助命を嘆願する声があがつた」とありますが、その理由が書かれている部分を、解答欄の言葉に続くように、文中から十字以内で抜き出さない。

問六、——⑥「何度も辞職願を出したが許されなかった」とありますが、これが言い表していることとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人生は、自分を必要としてくれる人のために働くべきだということ

イ
いつの時代も、老人は人々から特別あつかいされるということ

ウ 人生というものは、なかなか自分の思うようにはいかないということ

エドのような職業でも、辞職願は簡単には受理されないということ

問七、——⑦「薄氷を踏むような思い」とありますが、このときの気持ちとしてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分には能力はないという遠慮の気持ち えんりよ

イ 自分の失敗がばれるのではないかと不安な気持ち

ウ 自分の敵をけ落としてやろうという気持ち

エ　うまく仕事をこなしていけるかという気持ち

問八、——⑧「老人」が果たしている役割を主題から考えた場合、もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 貧しい農民にもそれなりの幸せがあるので、不相応な夢をみてはいけなさと、読者をいましめる役割

イ 人間にとっての本当の幸せや人生の楽しみとは何かを、「廬生」を通して読者に考えさせる役割

ウ 人生というものはなによりも信頼と名誉のある生き方が大切であると、読者に理解させる役割

工
年齢の差にかかわらず、うちとけた会話ができる友人をもつことの大切さを読者に教える役割

問九、——⑨「人生の楽しみも、こんなもんだよ」とありますが、「老人」が「廬生」にさとそうとしたこととしてみっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人生の楽しみは、人それぞれのもつ考え方によって異なるということ

イ 人生の楽しみは、チャンスはどう生かすかにかかっているということ

ウ 人生の楽しみは、本人が死を迎えるときまでわからないということ

エ 人生の楽しみは、健康で長生きすることによって達成できるということ

問十、——⑩「どんな人生を選ぶだろうか」とありますが、「廬生」はもともどのような人生をおくっていたのですか。「廬生」の「一
国の宰相と、貧しい農民を比べて、どちらが幸せとも言いません。」の言葉をふまえて、次の文の空欄にあてはまる言葉を文中
から十六字で抜き出して答えなさい。

を
お
く
っ
て
い
た。
。

三、次の①～⑩の――部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 世界的な規模に進展する。
- ② スポーツ界に君臨する。
- ③ 友人の意見に共鳴する。
- ④ 正しいかどうか識別する。
- ⑤ あわれな最期をとげる。
- ⑥ 地球オランダ化が進む。
- ⑦ カイシンの笑みを浮かべる。
- ⑧ 寺社にサンバイする。
- ⑨ 学校は社会のシユクスだ。
- ⑩ 不純物をジヨキヨする。

合 計	

受験番号					
1	2	3	4	5	6
				氏	
				名	